ネギま！　禁じられた魔法を統べる者

千日紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま！　禁じられた魔法を統べる者

【Ｎコード】
Ｎ２１４５ＢＡ

【作者名】
千日紅

【あらすじ】
普通の魔法よりも巨大な力を持つ『禁断魔法』。その魔法を制御する青年は、やがて「立派な魔法使い」を夢見る天才少年と出会い、『禁断魔法』と向き合うこととなる――――。

第1話　平和が崩れた日

信じられなかった。

ありえないと思いたかった。

『アレ』を無闇に使おうとする奴なんて、いないと思っていたのに。

「マダ残ッテイタカ…愚カナ人間ヨ……」

『アレ』が宿った闇が俺を捉える。

恐い。逃げたい。『アレ』は、危険だ。

しかし、いつもいつも親から言われていた言葉が、俺を逃さなかった。

――忘れるな、お前は『パンドラ』だ。『触れてはならないものを統べる者』なのだ

そう、俺は『パンドラ』。

人の欲望から『アレら』を封じ、管理し、統べる者。

己に課せられた大きな責任――今それを果たさずに、いつ果たすというのだ。

「――Nos autem eorum futurum sit verum mundus MINERVA（我、唯己が為に

未来、真理、世界を紡ぐ）」

震える声で始動キーを口ずさむ。

この言葉の通り、俺がやるのは誰のためでもない――俺が、明日を生きるため。

俺が、生きる理由を創るため。

そのためなら、いかなる痛みも甘受しよう。

今、『アレ』を封じることこそ、俺が生まれた理由なのだから。

第1話　平和が崩れた日（後書き）

オリジナル小説を放り出してやってしまいました。
出来れば、暖かい目で見てください。お願いします。
あと、始動キーのラテン語ですが、翻訳サイトで翻訳したものなので間違っていてもスルーしてください。
重ね重ね、お願いします。

第2話　麻帆良学園にて

日本にある麻帆良学園都市。その中でも最奥にある女子校舎。
現在は昼休みのため、生徒たちが思い思いに過ごす中、職員室でひとり深々と溜息を吐く青年がいた。
名をパンドラ・リンドヴルム。魔法先生のひとりであり、理科を担当する教師である。
19歳でありながら群を抜く秀才であり、同時に魔法使いでもあった。
イギリス出身の彼が、何故日本の学校で教師をやっているのかというと――
「何か悩んでいるのかい？　パンドラ君」
「……高畑先生」
薄い微笑を浮かべ彼に声を掛けてきた渋いオジサマ――2－A担任で英語担当教師、タカミチ・T・高畑のおかげなのだ。
10年前、ある事件で家を失った彼を、偶然知り合った高畑が引き取ったのだ。
「ああ…大変申し上げにくいことなのだが、どうにも2－Aの授業だけが上手くいかなくて。もう就任してから2年経とうとしているのに情けないことだと……」
高畑から若干目をそらしつつ話す。彼が担任を務めるクラスへの愚痴を言うなど失礼にもほどがある、ということと同時に、自分自身副担任をしているクラスが一番上手く授業が出来ないなどただの恥にほかならないからだ。
「まあ、あのクラスはいろいろと特殊だからね…」
そう、特殊なのだ。あのクラスは。
忍者やピエロ、ロボットに魔族と人間のハーフ、果ては吸血鬼の真祖。
もちろん普通の人間も存在しているのだが、彼女らはどうにもはっ

ちゃけていて、なかなか授業が上手く進まないのだ。
「特殊といっても、あそこまでいくと珍獣園だ」
ぼそりと呟いたパンドラの言葉に高畑は苦笑する。彼は手にしていた茶を啜ると、次いで話を変えた。
「今日の放課後は小テストの補修だと聞いたぞ。大丈夫かい？」
「いいえ…また２－Ａバカ五人衆（レンジャー）の相手だ。あいつらは私をおちょくっているのだろうか…」
「アスナ君は素で出来ないから、なんとも断言しにくいね」
神楽坂明日菜。
綾瀬夕映。
佐々木まき絵。
長瀬楓。
古菲。
クラス別成績で万年学年最下位の２－Ａの中でも特に成績の悪い五人。ゆえに、バカレンジャー。
その中で綾瀬はやればできるのだが、結局やらないので結論は一緒なのだ。
はあ、と再びパンドラが深い溜息を吐くと、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴った。
「じゃあ、僕は次授業だから、行くよ」
「…すまない。愚痴に付き合わせてしまった」
「気にするな。頑張れよ」
颯爽と職員室を高畑は後にする。
その姿勢のいい後姿を見ながら、パンドラはもう一つ、深い溜息を吐いたのだった。

第3話　バカレンジャーと放課後

放課後、気乗りはしないがこれも教師の仕事だと自分を納得させ、２－Ａの教室へと赴いたパンドラ。
今日の居残りはバカレンジャーの五人と龍宮真名、桜咲刹那。
「さて、さっさと追試始めるぞバカ五人衆とプラスアルファ。いつもの通り１０点満点中６点で合格だからな」
宣言し、用意してあったプリントを手渡す。
すると、龍宮と桜咲、綾瀬があっと言う間に持ってきた。
さらっと採点をすると三人とも１０点満点。
綾瀬はいつもの如く小テストはやる気が無く勉強しなかったから落ちたに違いない。
だが残り二人は成績優秀とはいかずとも一通り点は取れていたはず
――さては、また仕事とかで勉強をしなかったな。
「三人とも合格。だが龍宮と桜咲は残れ」
「…！！」
「う”っ」
すたすたと退室していく綾瀬。プラスアルファ組はパンドラの言葉に項垂れた。
その後、長瀬と古が提出。
長瀬は7点、古は5点だった。
「長瀬合格。帰って勉強しろ」
「まぁ、善処するでゴザる」
「やれ。――――古、お前は不合格だ。もう一回」
「そんなッ！？　うぅ～…次こそ合格アル！」
小テスト本番前にそのやる気を出せばいいものを。
軽く溜息を吐き、別バージョンのプリントを渡す。
今度は佐々木、神楽坂、そして再チャレンジの古が出してきた。
「佐々木４点、神楽坂３点、古６点」

「え！？」
「うそっ」
「やったアル～！」
嬉々として古は帰って行き、若干落ち込みながら佐々木と神楽坂は再び問題に取り組む。
１０分ほどの間のあと、佐々木が提出。
「どーですか、センセ？」
「――８点、合格だ。お前ももっと勉強しろ」
「にゃはは～。気が向いたらね～？」
そう軽やかに笑って佐々木も帰った。
残るは一番の難関――２－Ａ一のバカ、神楽坂明日菜。
「どうだ、神楽坂」
神楽坂の手元を覗き込むと、パンドラは一瞬硬直した。
「…お前、白紙かよ」
ギッと涙目になりながら神楽坂は呆れる青年教師を睨んだ。
「まったく…ヒントをやるから、やれるところまでやってみろ」
それから３０分後、ようやく神楽坂も合格し帰っていった。
気疲れが襲ってくるが、まだやることが残っている。
「――さて。何故私がお前たちを残したのかは、当然分かっているんだろうな？」
教室に残っている二人――龍宮と桜咲は素直に頷く。
「お前たちの仕事柄、忙しいのは私も承知している。だがそれでも学生というのは勉強が本分だ。よって、今度小テストで不合格だった場合、次の試験まで強制的に仕事は休業にさせる」
「な…！　それはさすがに勝手というものではないですか、先生！」
桜咲が声高に抗議するが、パンドラは淡々と返す。
「この話についても学園長も高畑先生も承認している。言っただろう？　学生は勉強が本分だと」
龍宮はわずかに目を鋭くしてパンドラを見据える。
「それなのに勉強ができない、しないことを仕事で言い訳をするの

は本末転倒だと――――そう言いたいのか？」
「その通り」
視線での抗議も意に介さず、パンドラは座っていたパイプ椅子から立ち上がり、黒板の文字を消す。
龍宮はマイペースな教師に、なおも声を掛ける。
「先生。だとしたら私たちは今すごく困った状況にあるのだが」
パンドラは無言で続きを促す。
「これから私たちは仕事なのだが」
転けて黒板消しを床に落とす。舞い上がった粉で彼は盛大にむせた。
「ごほっ、ごほっ…。な、何！？」
むせながら驚いている間に、律儀にも桜咲は黒板消しを拾い、教壇の上に置くと、箒とちりとりを持ってきた。
粉を掃き集める桜咲を尻目に、龍宮は説明を続ける。
「パンドラ先生も知っているとは思うが、明日２－Ａは高畑先生の英語の授業で小テストがある。しかし私たちはこれから魔物退治に出かけなければならない。そして仕事があると私たちは大抵２時頃にならんと帰ってこれないんだ」
「けほ、だから、何だと？」
「パンドラ先生に助力をお願いしたい」
突然軽く目眩がしてふらつく。なんとか体勢を立て直すと、龍宮を見返した。
「…それは、本気で言っているのか？」
「無論」
なんということだ。
パンドラは未だに少しふらつく頭を押さえて心の内で悪態を吐く。
まさか自分でこんな面倒な事態を招いてしまうとは――！
しかし生徒に「やれ」と言っておきながらここで引き下がっては、教師として示しがつかない。
「――――分かった。私も協力しよう」
ようやく目眩が収まった顔を上げ、自分を面倒事に巻き込んでくれ

やがった生徒二人を見据えて言った。

第４話　太刀と魔法と拳銃と

生徒二人の仕事に協力することになり、やって来たのは麻帆良学園から１０キロほど離れた林。
既に午後７時を過ぎており、暗くなっていた。
「先生、魔物を直接叩くのはわたしたちがやりますので、援護をお願いできますか？」
「もちろんだ。任せろ」
桜咲は野太刀、龍宮は拳銃を構えた。
龍宮は何も持っていないパンドラに問う。
「パンドラ先生は杖とかを使わないのか？」
「杖はただの補助道具だからな。私は特に必要としない」
魔法使いといえば杖、というイメージがあるが、魔力があり呪文を唱えられれば、魔法を使うことが出来るのだ。
会話をしている間に人ならざる気配が集まってきていた。
「お出ましのようだな。桜咲、龍宮、準備はいいか？」
「問題ありません」「ああ」
「では――いくぞ！」
木陰から異形――魔物が飛び出してくる。
桜咲は一振りで三体を切り裂き、龍宮は拳銃で次々と撃ち抜いていく。
「Ｎｏｓ　ａｕｔｅｍ　ｅｏｒｕｍ　ｆｕｔｕｒｕｍ　ｓｉｔ　ｖｅｒｕｍ　ｍｕｎｄｕｓ　ＭＩＮＥＲＶＡ――Ｆｌｕｘａ　ａｔｑｕｅ　ｆｒａｇｉｌｉｓ　Ｎｕｌｌａｍ　ｓｅ（脆く儚い我が身を護れ）、『安らぎの園』！」
頭上から飛びかかってきた魔物たちを防御魔法で弾く。
更に、無詠唱で氷の矢を五本飛ばし、五体を貫いた。
その間に桜咲と龍宮は数十体も倒しているのだが、魔物たちは次から次へと出現してくる。

「なんでこんなに魔物がいるんだ！？　誰かが召喚でもしているのか！？」
真っ正面から突撃してきた約十体の魔物を再び『安らぎの園』で弾く。
「くっ…分かりません！　ですが、恐らく今周りにいる二十体ほどで終わりかと思います！」
「おいっ、パンドラ先生！　何か敵を一掃できるような魔法はないのか！」
「援護しろと言ったのはお前たちだろうが！！」
龍宮のセリフに腹を立てたが、確かに状況は不利だ。
「仕方ない」で使いたくはない――だが、自分には教師として生徒を守る義務がある。
数瞬躊躇った後、今回だけだ、と自分に言い聞かせ、魔法陣を展開する。
「Ｓｅｄ　ｖｅｒｕｍ　ａｄ　ｐｒａｅｔｅｒｉｔｕｍ，　ｎｅｃ　ｆｕｔｕｒｕｍ　ｅｓｔ　ｖｅｒｕｍ　ｃｏｇｎｏｓｃｅｒｅ（真理無き者に過去は無く、真実知らぬ者に未来は無い）――Ｏｍｎｅｓ　ｓｃｉｕｎｔ，　ｉｎ　ｄｅｓｐｅｒａｔｉｏｎｅｍ，　ｅｔ　ａｂｉｉｔ（全てを知り、絶望し、消えよ）！　Ｖｅｓｔｉｂｕｌｕｍ　ｒｅｃｅｓｓｕｓ（禁断解放）――『真理の刃』！」
白銀の光が魔物たちに降り注ぎ、貫いていく。
桜咲と龍宮はその光景を唖然として見ている。
やがて、光が収まったとき、そこには魔物は一体として存在しなかった。
パンドラは魔力を大量消費した疲れからくる息切れをなんとか整えようとして、むせた。
「げほっ、ごほっ！！」
「せ、先生！？　大丈夫ですか！？」
桜咲は心配して彼の背中を擦る。龍宮は呆れ顔で未だむせ続ける彼

を見た。
「――かっこ悪いな、パンドラ先生」
「うるさい！――げほっ」

◆◆◆

時刻は８時半過ぎ――既に辺りは真っ暗で、時折吹く風がひどく冷たい。
「それにしても、先生はあんな魔法も使えたんですね。知りませんでした」
「当然だろう、あれは禁――普段使う必要のない魔法だからな」
パンドラは危うく言ってはいけないことを言いかけ、慌てて言い直した。
言ってはいけないこと――それは、巨大な力を宿し制御が難しいため、使用はおろか習得すら禁じられた魔法、『禁断魔法』のこと。
パンドラは訳あって『禁断魔法』を管理しているが、それを公言することも使用することもしてこなかった。
何故なら、人間は手を触れてはいけないと分かっていても、時には己の私欲のために禁忌に触れようとする生き物だからだ。
そんな人間に彼が『禁断魔法』を管理していることが知れれば、双方ともただでは済まないだろう。
ゆえに彼は隠してきたのだが、今回彼が使用したのが『禁断魔法』と分からないようだとはいえ、二人もの人間の前で披露してしまったのだ。
彼は攻撃用の魔法はあまり多くは習得しておらず、今回のことは不可抗力とも言えるのだが、彼の心中は複雑だった。
「本当にな。先生があんな魔法を使えると最初から知っていれば、援護などさせずに一網打尽にしてもらったものを」

「何都合の良い事を言っている、龍宮。そういうのを望むのなら行き当たりばったりで私に頼むよりも、高畑先生なり他の魔法使いなりに相談しておけばよかったんじゃないのか」
パンドラが龍宮に言い返すと、彼女と桜咲はぴた、と歩みを止めた。
「そうか、その手があったか…」
「…そうでしたね。失念していました」
「……阿呆か」
では次はああしよう、こうしようと会議を始めた彼女らを見て、『禁断魔法』について口止めをしようかと考えたが、彼女らは『禁断魔法』だと分かっていないようだったので、逆に口止めしようとすると怪しまれるだろう。
（…ま、今回はいいか。何かあれば記憶を消すなりすればいい）
心の中で結論付けると、大きく欠伸をした。

満天の星空が、いつもよりも綺麗な気がしたのは果たして気のせいだったのだろうか――。

第5話　嵐の予感

桜咲と龍宮の仕事に付き合わされてから一週間、ほとんど何事もなく過ごしたパンドラ。
平和な日々に満足していたが、いわゆる「嵐の前の静けさ」なのではないかと少し不安になってもいた。
今日も全ての授業が終わり、職員室で茶を啜りながら一息ついていると、高畑がやってきた。
「今日もお疲れ、パンドラ君」
「高畑先生、早いな。ホームルームはもう終わったのか？」
「まあね。伝えることを伝えて終わりだから」
さすがだな、と一言呟いて再び湯飲みを傾ける。
そんな彼の前で、高畑は爆弾発言じみたセリフを投下した。
「パンドラ君、突然だけど明日から教育実習生が来るよ」
「ぶっ……はぁ！？　この時期にか！？」
パンドラは驚いて茶を吐き出しかけるも踏みとどまり、高畑に詰め寄った。
「厳密にいうと、イギリスのメルディアナ魔法学校を首席で卒業した子が、最終課題で日本で先生をやるんだ」
「ふーん…修行というものか……って、『子』？」
『人』でも『彼』でも『彼女』でもなく、『子』。
「こ、子供が来るのか？」
「えぇと…確か、十歳だったかな」
「十歳……！！」
最悪だ。目眩がしてきた。
パンドラは子供が嫌いだ。騒ぐし、わがままは言うし、言うことは聞かないし、物を知らないし、いつでも自分が正しいと思っている。
世界は善と悪――白と黒で割り切れると思っている。
最後の点については今の魔法使いたちにも言える。

正義の魔法使いだの悪の魔法使いだの、お前たちは子供なのか、そうなのかと問いただしたい衝動に駆られたことが何度あったことか。
「おーい、大丈夫かい？」
「あ、ああ…すまない」
嵐だ、嵐がくるぞ。とてつもない嵐が。
凄まじいほどの嫌な予感を胸に抱え、パンドラは頭痛もしてきた頭を押さえた。

◆
◆
◆

翌日、頭痛薬を飲み下し、職員室で大人しくしていると、女子の叫び声が聞こえた。
「取り消しなさいよー！！」
この耳障りな叫び声は恐らく２－Ａ一のバカ、神楽坂明日菜のものだろう。
その後、高畑が窓を開け、下にいる者たちに何かを言ったと思ったら、パンドラを招いて外へと出た。
そこにいたのは神楽坂明日菜と学園長の孫娘、近衛木乃香。
そして、小さい、眼鏡を掛けた子供――。
「はじめまして、本日付けで英語授業を担当することになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

この出会いから、パンドラは否が応でも長い戦いに巻き込まれることになったのだ――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2145ba/

ネギま！　禁じられた魔法を統べる者

2012年1月6日20時53分発行